

Global Classrooms

グローバル・クラスルーム

報告書

高校模擬国連国際大会への第12回日本代表団派遣支援事業



2018年6月



グローバル・クラスルーム日本委員会
Japan Committee for Global Classrooms

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

【後援】

外務省
文部科学省
国際連合広報センター

【協賛】

株式会社 iBECK



株式会社エヌエフ回路設計ブロック



キッコーマン株式会社



TOEFL Junior® (GC&T)



株式会社 JTB



感動のそばに、いつも。

SOMPO ちきゅう倶楽部
(SOMPO ホールディングスグループ)



株式会社内田洋行



内田洋行

学校法人河合塾



株式会社公文教育研究会



株式会社講談社

おもしろくて、ためになる

講談社

学校法人駿河台学園



学校法人高宮学園 代々木ゼミナール



一般財団法人凸版印刷三幸会

TOPPAN

株式会社ナガセ

東進ハイスクール・東進衛星予備校

東進ハイスクール

株式会社ニチレイ

NICHIREI

海外トップ大進学塾 Route H
(ベネッセコーポレーション)

 Route H

三菱商事株式会社

 **三菱商事**

トヨタ自動車株式会社

TOYOTA

株式会社日能研



Global Learning Center
(ベネッセコーポレーション)

 GLOBAL
LEARNING
CENTER

株式会社みずほ銀行

MIZUHO みずほ銀行

【協力】

日本航空株式会社


JAPAN AIRLINES

理想科学工業株式会社



【助成】

公益財団法人渋沢栄一記念財団
公益財団法人公文国際奨学財団

より助成金の交付を受けております。

内容

はじめに	5
グローバル・クラスルーム日本委員会.....	6
事業概要	7
支援者・支援団体一覧.....	36
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）からのメッセージ.....	37
関連リンク	39



国連本部にあるモニュメント「発射不能の銃」（「Non-Violence」）前にて

はじめに

この度、高校模擬国連国際大会への 12 回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆様にお届けできる運びとなりました。本事業では、関係省庁・団体、企業・法人等、多くの皆様のご支援・ご協力を賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本事業では、2017 年 11 月に国連大学で行われた第 12 回全国高校模擬国連大会にて優秀な成績を収めた 6 校 11 名の高校生が、日本代表団として、2018 年 5 月にニューヨークで開催された国際大会に参加しました。今年度は、日本代表団はウルグアイ東方共和国の大使として、「世界」を舞台に、持てる力の全てを出し切って会議に臨みました。

派遣生は皆、自分の全力を持って「世界」に立ち向かい、2 日間を乗り越えました。当初掲げた目標を達成した方もいれば、世界の「壁」を感じ、挫折しそうになった方もいるでしょう。しかしながら、彼らが「世界」に向き合ったことはまぎれもない事実であり、それはきっと彼らにとってかけがえのない財産になるでしょう。大会の「結果」に目が向きがちになるかもしれませんが、この「過程」にこそグローバル・クラスルーム日本委員会が提供する価値があると私は信じており、その価値を生かし派遣生それぞれが新たな一歩を踏み出していくことを心より願っております。

最後に、グローバル・クラスルーム日本委員会は昨年度より新たな 10 年を歩み始めました。高校模擬国連は、参加していただいている生徒たち自身のレベルが年々飛躍的に向上しています。我々一同、新たな価値を我々の活動の中に見出し、より質の高い活動を提供することで、模擬国連活動の普及と発展に向けて一層邁進してまいります。今後とも、グローバル・クラスルーム日本委員会へのご支援・ご指導をよろしくお願いいたします。

グローバル・クラスルーム日本委員会
2018 年度 理事長 岡野源

グローバル・クラスルーム日本委員会

グローバル・クラスルームは、国連会議のシミュレーション（模擬国連）を通じて、現代世界における様々な課題について学ぶための先進的な教育プログラムとして、公立中学校・高校を対象に、米国国連協会の提唱により始まりました。模擬国連に参加する生徒は、国連加盟国の大使として、国際問題を討議し、決議案を作成し、賛成者・反対者と交渉し、世界が直面する課題の解決に向けて、「国際協力」を実現していきます。

米国国連協会は、このグローバル・クラスルームを米国諸都市のみならず世界各地に普及させることで、国際理解教育と模擬国連の良さを多くの国の学校と共有するとともに、模擬国連コミュニティの裾野を広げようとしています。

グローバル・クラスルームは、既に中国、インド、ドイツ、レバノン等で始まっています。日本でも、大学生の模擬国連は 30 年以上の歴史があり、毎年全日本模擬国連大会が開催されています。そして 2007 年、かねてより若年層に対して国際問題を討議する際に欠かすことができない経済や国際金融の知識の普及活動をグローバルに行ってきたメルリリンチ社をスポンサーに迎えグローバル・クラスルーム日本委員会が組織され、同年の第 1 回日本代表団の国際大会への派遣を皮切りに高校生の模擬国連活動が始まりました。



第 12 回全日本高校模擬国連の様子

事業概要

【企画名称】

高校模擬国連国際大会への第12回日本代表団
派遣支援事業

【主催】

グローバル・クラスルーム日本委員会
(JCGC)、
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
(ACCU)

【日程】

2017年5月8日(火)～14日(月)

【開催場所】

米国ニューヨーク市

【内容】

米国国連協会の主催により開催される高校模
擬国連国際大会(Global Classrooms International
High School Model United Nations Conference)
に、グローバル・クラスルーム日本委員会主催
の第11回全日本高校模擬国連大会にて選出さ
れた高校生が日本代表団として参加するための
派遣支援事業である。同大会には世界20か国
以上から総勢約1500名の高校生が参加した。

1) 日本代表団(11名)

浅野高等学校
水口 幸夫、高田 陽一郎
海城高等学校
山田 健人
渋谷教育学園渋谷高等学校
石川 満留、長谷川 えみ里
頌栄女子学院高等学校
橋本 京、元田 有香
桐蔭学園中等教育学校
永見 大智、渡邊 玲央
鳥取県立鳥取西高等学校
青木 優奈、鎌田 康生

2) 引率教員(6名)

宮坂 武志(浅野高等学校)
岡崎 行則(海城高等学校)
菅家 万里江(渋谷教育学園渋谷高等学校)
飯島 裕希(頌栄女子学院高等学校)
安井 健人(桐蔭学園中等教育学校)
中村 秀司(鳥取県立鳥取西高等学校)

3) グローバル・クラスルーム日本委員会 (3名)

研究主任 石本 達也(東京大学3年)
研究 鷺海 晶(東京大学2年)
広報局 鈴木 雅子(日本大学2年)

4) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センタ ー(1名)

国際教育交流部 河口 枝里子



J ジョン・F・ケネディ空港派遣団にて(派遣団全員)

派遣報告

【派遣日程】

4月15日(日) インフォメーション・セッション
 5月8日(火) 日本出発
 ニューヨーク到着
 UN Women 訪問
 5月9日(水) UNICEF 訪問
 国連日本政府代表部訪問
 5月10日(木) 国際連合事務次長軍縮担当上級代表
 中満泉氏訪問
 日本貿易振興機構(JETRO)
 ・ニューヨーク事務所訪問
 5月11日(金) 高校模擬国連国際大会 会議1日目
 5月12日(土) 高校模擬国連国際大会 会議2日目
 高校模擬国連国際大会 閉会式
 5月13日(日) ニューヨーク出発
 5月14日(月) 日本帰国
 6月24日(日) 報告会



国連本部総会議場にて国連日本政府代表部星野大使と派遣生

【参加会議】

学校名	生徒名	担当会議	議題
浅野高等学校	水口 幸夫 高田 陽一郎	General Assembly 3 (GA3)	Political prisoners and prisoners of conscience about the freedom of expression
海城高等学校	山田 健人	United Nations Industrial Development Organization (UNIDO)	Sustainable production of biofuels in developing countries
渋谷教育学園 渋谷高等学校	石川 満留 長谷川 えみ里	Economic Commission for Latin America and the Caribbean (ECLAC)	Strengthening Social Protection for the Most Vulnerable
頌栄女子学院 高等学校	橋本 京 元田 有香	World Intellectual Property Organization (WIPO)	Patent rights vs. patient rights
桐蔭学園 中等教育学校	永見 大智 渡邊 玲央	Security Council (SC)	Election Monitoring
鳥取県立鳥取 西高等学校	青木 優奈 鎌田 康生	United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO)	Finding the right balance between tourism and conservation

April 15

【インフォメーション・セッション】

日本出版会館の会議室にて、渡米前の説明会及び政策発表会を行いました。評議員や ACCU 進藤部長による激励の言葉を受け、派遣生たちは国際大会が目前まで迫っていることを改めて認識し、決意を新たにしました。

政策発表会では、担当国であるウルグアイ東方共和国の大使として、担当会議ごとに設定された議題について自分たちの政策を英語で発表しました。派遣生たちは、外務省よりお越しいただいた川上様からのフィードバックに加え、評議員の先生からのアドバイス、派遣生同士での質疑応答を通じて担当会議・議題についての理解を深めました。また午後に行われたグループディスカッションでは、派遣生たちは英語を駆使して話し合い、親睦を深めると同時に、自分たちのスキルアップに努めました。

今年度も過去の国際大会派遣生が多く集まり、派遣生たちは様々なアドバイスを受けるなどして有意義な時間を過ごしました。



派遣生による英語のプレゼンテーションの様子



日本出発前に羽田空港にて記念撮

May 8

【日本出発・NY 到着】

羽田空港からジョン・F・ケネディ空港へと出発しました。派遣生達は皆リラックスした様子で、派遣に向けて意気込んでいる様子でした。

【UN Women 訪問】

ここで私たちは現在最もホットな話題の一つでもあるジェンダー平等に着いてお話を聞きました。女性のエンパワメントや社会進出、また出産育児と仕事の両立、また Heforshe（男性とともにジェンダー平等を呼びかける活動）についてのプレゼンを受けました。UN Women はこのような問題に対してインターネット、SNS を通じて啓発活動を行なっていますが、それを受けて実際の社会に変化をもたらすには私たちが動き出さなければならないと強く感じました。

また今回の表敬訪問では、国連と UN Women が制作、配信しているジェンダー平等促進のための動画を見せていただきました。昨今インターネットなどの様々なメディアを通じて情報が発信され、共有されていますが、その動画はとても印象深く、訴えかけてくるものが多くありました。ジェンダーにおいて、メディアの影響力が「実社会でジェンダー平等が促進される」という結果に還元されるためには、日頃から問題に対して敏感になり、また課題解決策を考え、世界、その前に日本でのジェンダー平等の達成を実現させていきたいと強く思いました。

(水口・高田・青木)



UN WOMEN 職員と派遣生と引率教員

May 9

【UNICEF 訪問】

「紛争当事者でも子供は敵じゃない。みんなで Unite していこう。」私たちは5月9日に UNICEF を訪問し、UNICEF で仕事をされている日本人職員の方々から UNICEF とは何か、職員の方々の体験談、国際機関で働くときの心構えを伺いました。UNICEF は第二次世界大戦で被災した子供たちに緊急支援を行うことを目的として、1946 年に設立された国際機関です。現在は「子供の権利条約」を活動の指標とし、それをどのように具現化するかを追求しています。具体的には、教育、栄養、水の衛生を始めたとした多分野において、政府機関や NGO と協力しながら子供の支援を行なっています。職員の方のお話では、支援国では、現場主義に基づき、5 年スパンの計画を立てた後、援助に必要な専門家や資金を集め、政府の合意を得た上で活動が展開されます。どの活動も成功に導く為には、長期スパンでの地道な取り組みが必要であるとおっしゃっていたことが印象的でした。自分が持っていた、総合的なガバナンスを主にする国連に対するイメージとの違いに驚きつつも、UNICEF が扱う課題の難しさや複雑さを考えてみれば納得のいくことでした。

(元田・長谷川)



ユニセフの日本人職員と派遣生

【国連日本政府代表部訪問】

国連日本政府代表部次席常駐代表、星野俊也大使への訪問では、国連の日常についてお話をお伺いしました。日本での模擬国連活動を始めた方の一人でもある星野大使のお話からは、多様性の中で働くことの充実感が感じ取られた一方で、決議案を作成する時には物事の解釈を明確にする段階から始める必要があること、さらに決議が守られるとは限らないこと、など国連の厳しさも垣間見えました。

星野大使は、様々な国益や価値観が存在する中で国家間の信頼関係、特に個人間の信頼関係を重視されていて、その重要性について模擬国連を通して経験してきた私たちにとって、会議中に他国とどう向き合うべきかを再考できる機会になりました。また、本省からの指示に対応して慎重に利害の一致を図る、一筋縄では行かない外交は根気よく向き合う必要があるのだと感じ、複雑さを経験しながらもご自身で外交に魅力を見出されているお姿に敬意の念を抱きました。閉会式後まで激励に自ら来てくださった星野大使に感謝申し上げます。

(石川・山田)



星野大使と派遣生

May 10

【中満泉様事務所訪問】

日本人女性で初めて国連事務次長として軍縮担当上級代表を務めておられる中満泉氏に、軍縮における国連の取り組みについて貴重なお話を伺うことができました。21世紀に入り、世界情勢が大きく変わった現在、軍備縮小に向けて新しい国際規範の必要性や、それに向けた核保有国同士の「対話」重要性について話しておられました。国連では現在、事務総長による新しい軍縮アジェンダが発表されるなど、人命を救うための軍縮を目指す取り組みが行われています。

質疑応答では、分野を問わず質問をさせて頂き、若い世代を巻き込んだ責任ある発明や、女性がイニシアチブをとってジェンダー平等に取り組むことの大切さに気づかされました。また、ご自身が国連で働いてこられた中での経験についてのお話を伺うこともでき、より多くの日本人が国連で働くことを期待しているとのことを受け、大変刺激を受けました。実際に世界で活躍されている日本人女性のお話を伺い、国際大会を前にした私たちにとって、非常に実りのある経験となりました。(橋本・鎌田)



中満氏と派遣生

【日本貿易振興機構（JETRO）ニューヨーク事務所訪問】

海外において経済活性化のためのプロジェクトを行う JETRO は、常に「交渉の難しさ」と向き合っているということを体感しました。世界各国のビジネスパーソンと、双方の利益が最大化されるような合意を取り付けるという点で模擬国連との相関性を感じ、模擬国連で行っている活動が将来の仕事にも活かせるということを感じました。

また、近年「日本製品の良さを説明して欲しい」という要望が世界各国から寄せられていることを知り、“ブランド”ではなくきちんと製品の中身まで見た上で“より良い製品”を購入しようとする消費者が多くなってきている現状も垣間見ることができました。さらに日本企業は現在、高品質の商品を開発・生産できる一方、「商品売るのが上手くない」という問題を抱えています。その背景には「“よい商品”なら自然と買ってくれる」という品質を支えてきた精神が交渉の障害にもなっているそうです。

日本は、今後急速なペースで少子高齢化が進んでいくため、海外に潤沢な市場を見出すことは不可欠だと言えます。JETRO ニューヨーク事務所の訪問で海外市場へと先陣を切る JETRO の献身さ・使命感を理解できたとともに、「相手のニーズを把握すること」や「物事を的確に説明すること」の重要性を再認識することができました。(永見・渡邊)



JETRO 職員と派遣生

May 11-12

【高校模擬国連国際大会 会議 1 日目】

高校模擬国連国際大会が Grand Hyatt Hotel にて行われました。派遣生によって参加する会議や扱う議題も様々でしたが、どのチームも真剣に他国大使と交渉し、自国の国益達成を目指しました。

【高校模擬国連国際大会 会議 2 日目】

初日の会議行動が思うようにいった派遣生もいかなかった派遣生も直前まで会議戦略を練り直した上で、2 日目の会議に臨みました。どの派遣生も自分が設定した目標に向かって最後まで諦めずに交渉を続けました。



派遣生の会議の様子

【高校模擬国連国際大会 閉会式】

会議終了後、閉会式が国連本部総会本会議場にて行われました。今派遣では渋谷教育学園渋谷高等学校、頌栄女子学院高等学校が優秀賞 (Honorable Mention Award) を、海城高等学校が、12 回にわたる派遣支援事業で 2 度目となる最優秀賞 (Secretary General Award) を受賞しました。二日間の会議を終えた派遣生達は達成感に満ち溢れた表情をしていました。



閉会式が行われた国連本部総会議場にて

May 13-14

【ニューヨーク 出発・日本帰国】

ニューヨークでの 6 日間があっという間に過ぎ去り、13 日にジョン・F・ケネディ国際空港を出発し、14 日に帰国しました。異国の地で見事会議を乗り切った派遣生達は渡米前に比べて何倍も遅くなったように思われます。



米国出発前

受賞

本年度、日本代表団は3校が賞を受賞しました。

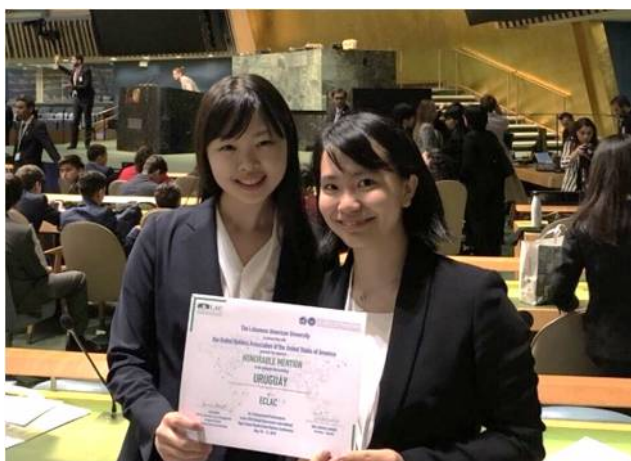
【最優秀賞(Secretary General Award)】

- 海城高等学校…国連工業開発機関 (UNIDO)
議題：Sustainable production of biofuels in developing countries

【優秀賞(Honorable Mention Award)】

- 渋谷教育学園渋谷高等学校…ラテンアメリカ・カリブ経済委員会 (ECLAC)
Strengthening Social Protection for the Most Vulnerable
- 頌栄女子学院高等学校…世界知的所有権機関 (WIPO)
Patent rights vs. Patient rights

渋谷教育学園渋谷高等学校



頌栄女子学院高等学校



海城高等学校



参加者報告（アドバイザー）

鈴木 雅子

日本大学生物資源科学部獣医学科2年
グローバル・クラスルーム日本委員会理事

まず初めに、今回無事高校生国際模擬国連大会への第12回日本代表団派遣支援事業の派遣を開催できる運びとなりましたことを大変嬉しく思っております。これも日頃よりお世話になっております、協賛企業・後援・支援者の皆様を初めとして、事業に参加いただいた引率教員・生徒の皆様、運営関係者の皆様全員のご協力のおかげに他なりません。

2年前派遣生としてこの事業に参加した私が、今回運営側として12期派遣生の引率をさせていただいて、自身の経験と重ね合わせて特に印象に残ることが多くありました。

私事にはなりますが、そもそも私が本事業の運営に携わってみたいと考えたのは、派遣時の経験の未消化感からでした。自分が派遣生の時には、国際大会では日本とは異なる模擬国連のあり方にひたすら戸惑って、焦りから勝手に色々なことをプレッシャーに感じ、結局会議で何も爪痕を残せなかったという悔しい思いが色濃く残りました。高校3年生というタイミングもあり、自分が何もできない辛さから、なぜ自分が将来の夢である獣医に全く関係のない模擬国連をやっているのだらうというようなことをずっと考えていました。

そのため、当時派遣はたしかに何か私にとってものすごく貴重な「良縁」なのであろうという思いは残しつつも、それが一体何であるのか良く考えられないまま、今までの余韻に蓋をして、とりあえず目の前の受験勉強に向かいました。

すっかり模擬国連活動も忘れた頃、大学に入ってから運営のお誘いをいただいた時に真っ先に思い浮かんだことはあの贅沢で辛い経験をなかったことにするのはあまりにもったいないということです。ちょうどその頃、大学では1年生のため獣医の専門科目はほとんど始まっていず、一般教養科目ばかりで、果たして今まで盲目的に突き進んできたマニャックな獣医の道が本当に自分に合っているのか確かめられず自信がなくなって来ていた時期でした。そんな時期だからこそ、先取りをすることも良いけれど、一度今までの自分の経験を振り返って一つ一つが自分の血肉となるよう落ち着いて消化をしてみても良いかもしれないと思い、自分がお世話になった模擬国連事業へのささやかな恩返しの意味も込めて、運営の視点から見つめ直し

て、何か新しい発見を期待してみようと思いました。運営の中で、自分でも整理出来ていないこの事業の良さを広報活動の一環で他者に説明せざるを得ない状況などに多々直面して考えさせられたりするうちに、自分にとってのこの事業の意味が少しずつ見えて来ました。

私にとっての派遣の経験は、当時情けないほど何もできなかったからこそ、私は何か武器を持たないと活躍できないと分かったことです。他の派遣 OBOG など、特に模擬国連をやっているような人を見ると、私には信じられないくらい自然に、新しい場でも難なく人の輪の中心に立って、流暢な英語で人をまとめ、状況を楽しみながらどんどん前に出られる、いわゆる誰もが思い浮かべる典型的な「グローバル人材」を体現したような人たちがいます。それは純粋に羨ましいとも思いますが、そこに来るまでにその人自身が意識的にもしくは無意識的に、努力してきたからこそその結果なのだと思います。もちろん私もそれを目指すべく努力することも大切なのですが、私とその人は違う人間である以上、同じ戦い方をしても意味がないだろうと思うのです。その人に合った方法で、その人の長所を生かした武器を持ってでないと、自分の持っている力を最大限発揮することはできません。それに気づいてから、やはり自分の興味があり極めたいと思える獣医を一つの自分の武器として持つことで、もっと専門的に、もっと楽しく世界で私なりの方法で活躍することが出来るのではないかと初めて今までの経験が将来に繋がるような前向きな考えへと変わりました。

そのため、今回の派遣では自分が感じたように、派遣生それぞれもぜひ何かしら長期的に将来に向けてつながるような経験をしてほしいと思い、微力ながらお手伝いさせていただきました。彼らにとって将来のロールモデルとしたいくなるようなたくさんの素敵な「本物」の社会人の方の元に表敬訪問に伺わさせていただいたり、国際大会の会議に真剣に取り組んだりする経験を通して、派遣生が一つ一つの経験で一喜一憂したり色々なことを考える姿を見て、共感するところや感慨深く思うところが多かったです。

その中でも特に、派遣生たちは自分が想像していたよりもはるかに優秀で、真面目で、何よりも強かったのがとても印象的でした。自分が経験したからこそ辛いだろうなと強く共感する分、その中でも最後まで自分たち自身でなんとかしてみようと苦しみ抜いてあきらめない姿勢

にとてつもない強さを感じとても頼もしく思いました。この経験を元に、私が派遣生の時に当時の研究主任に言われた「君たちは模擬国連のプロになるのではなく、各分野で模擬国連での経験を生かしたプロになってください」という言葉をぜひ体現して将来に繋げてもらえればと思います。

また、この経験の糧を繋げられたことの背景にある、事業を支えて下さる無数の方々の心温かいサポートに恵まれた良縁に心から感謝しております。ありがとうございました。



石本 達也

東京大学工学部化学システム工学科3年
グローバル・クラスルーム日本委員会研究主任

国際問題の知識をはじめ、情報収集および政策立案の能力、会議での議論や交渉の能力など高校生が模擬国連を通じて得られるものは多様です。そして高校模擬国連国際大会は上記のものだけでなく、様々な経験を派遣生に与えてくれました。派遣生の会議準備や国際大会当日の会議行動をサポートし、一番近く派遣生を見ることができた研究主任として今回の派遣事業を振り返りたいと思います。

今回の担当国はウルグアイというあまり日本にはなじみがなく、国自体について調べるにも情報源が限定されるような国でしたが、派遣生は国について、またそれぞれの議題について書籍や論文などを駆使して徹底的にリサーチを行い、政策を考え抜きました。中にはウルグアイ大使館に訪問し、ウルグアイの実情や問題意識を聞いて、政策立案に生かそうとする派遣生もいるなど、派遣生が受動的にではなく、自分たちから能動的に情報を集める姿勢を感じることが多くありました。こうしたおよそ半年にわたる会議準備と政策の量と質、そして与えられた機会からできる限り多くのことを吸収しようとする貪欲さは国際大会の参加者のなかで突出していたことは断言できます。

会議本番では、派遣生は言葉の壁、日本の模擬国連と異なる会議の進み方など様々な困難に直面しました。普通なら萎縮してしまいそうな状況の中で、派遣生たちはその困難を乗り越えようと果敢に挑み、自分たちがその会議に最大限貢献するための努力を最後まで続けていました。中にはグループのリーダーとなったり、成果文書の提出国となったりと、議場の中心で活躍する派遣生の姿も多く見られました。

国際大会への準備を始めるにあたって、派遣生には個人がこの国際大会を通して何を達成したいか考えてもらいました。多くの派遣生は受賞を目標にしていたましたが、私は彼らのサポートにあたって、再度自分たちと向き合い、現状から目標を達成するにはどうすればいいのかを考え、自分の目標に向かって邁進することを何度も伝えてきました。なかなかうまくいかないときも諦めず「自分たちに何ができるか」を模索する姿勢を最後まで持っていました。その姿を見て私自身心を動かされました。

国際大会は世界各地から集まった自分とは全く異なる文化圏、環境のなかで生きている人々

と一つの議題について真剣に考え、議論するという貴重な経験を与えてくれます。会議の中で参加者のこれまで生きてきた背景が垣間見えることで自分との違いを実感し、自身を相対化できることが、今後世界で活躍するであろう派遣生にとって貴重な経験になると考えております。日本の模擬国連と、会議の進め方や議場の雰囲気など多くの点で異なりますが、人を引き付けるリーダーシップや優れた交渉術など、他の参加者から派遣生は様々なことを学んでいた印象を受けました。この大会で派遣生が世界水準の模擬国連を体感できたことはこれからの派遣生の人生の糧になることを信じております。

今回の国際大会は派遣生にとって模擬国連人生の集大成であり、一つの区切りとなります。派遣生たちは自分の能力を総動員してこの大会に臨みました。しかし、すべての派遣生にとって、この大会が完全にうまくいったわけではなく、不本意に思うところ、悔しい気持ちを抱いております。彼らひとりひとりの感じたことは、後ろの頁にございます派遣生の報告をご覧くださいいただければ感じていただけたと思います。完全な形で目標を達成することはとても難しいことです。私は派遣生には良いところ・悪いところを含めてこの大会を通じて自分自身の中で「変化した」部分をじっくり考察していただきたいと考えております。それは今回の国際大会が派遣生にとって一つの通過点であると同時に、彼らの人生におけるマイルストーンであり、その考察が今後の人生の指針になると確信しているからです。派遣生が10年後、20年後どのような活躍をしているのか、楽しみでなりません。

最後になりましたが、今回の高校模擬国連国際大会への派遣事業にご支援、ご協賛くださったすべての皆様に、グローバル・クラスルーム日本委員会の一員として厚く御礼申し上げます。今後ともグローバル・クラスルーム日本委員会への変わらぬご厚誼賜りますようお願い申し上げます。



鴛海 晶

東京大学前期教養学部文科Ⅰ類2年

グローバル・クラスルーム日本委員会研究

はじめに、本派遣事業にご支援、ご協力いただいた皆様に深く御礼申し上げます。

今年度、私は二年研究の立場から、研究主任の補佐という形で派遣事業にかかわらせていただきました。私自身、高校模擬国連活動自体にGCのメンバーとして関わる初めての機会でしたが、会議及び派遣生の様子から気づかされることは多々ありましたのでご報告させていただきます。

今年度、派遣生たちはウルグアイ代表として会議に参加しました。ウルグアイという国は基本的に中立的な立場の国であり、準備の段階から派遣生たちは準備で培った議題理解に基づいて、自国の国益はもちろんのこと、国際社会全体のあり方、未来にあるべき姿をも考えた上での、準備および会議行動ができたように思われます。これは模擬国連という活動においても、グローバルリーダーの育成というGCの目的からしても歓迎すべき態度であったと思います。

しかしながら、会議において派遣生の全員が思う通りに会議を進められていたわけではありませんでした。人によっては全日本大会と同様のやり方で会議準備を行い、戦略をたててうまく会議を主導できた派遣生もいましたが、一方で日本での高校模擬国連とは違い、より議論を密に行う議場で戸惑いが隠しきれない派遣生もいました。どちらにしても、多様な人が多様な国の大使を演じる国際大会の場で、日本代表として、参加者の意識・言語・形式など様々な点が今まで日本で取り組んでいたものとは異なる模擬国連を行うことから得た自信、反省点は派遣生の未来にとって大きなものになったのではないかと思います。

模擬国連は大変な労力がかかる営みです。そのような活動において最後まで自分のできることを考えて目の前の課題に向き合おうとし、自らの成長に貪欲に姿勢を崩さない派遣生を見ていて私自身、改めて模擬国連活動の素晴らしさおよび可能性を思い知らされました。

私は来年度も派遣生のサポートで渡米させていただきます。その際には今年見てきたこと、渡米の準備、本番の段階で気づいたことを存分に生かして派遣生のサポートを行って行きたいと思います。

最後に、ご支援ご協力いただいた全ての皆様にもう一度厚く御礼申し上げますとともに、今後の事業継続にもご支援賜りますよう深くお願い申し上げて私からの報告を終わらせていただきます。



参加者報告（派遣生）

水口 幸夫

浅野高等学校 3 年

模擬国連という活動は私にとって刺激的なものでした。自分を成長させるためには自分にはないスキルを兼ね備えた人物に出会い、刺激を受けることが最も効果的だと思うのですが、模擬国連はそのような体験に最適な活動であると思っています。負けず嫌いな性格の自分にとって、「すごい」と思った相手に会おうと何とかして超えようと努力し続けたことが、模擬国連で得たかったスキル（具体的には、個人によって異なると思いますが、リーダーシップ力や交渉力等）を向上させることに繋がりました。だから無我夢中だった自分の 1 年半の模擬国連活動はとても充実していました。

模擬国連の国際会議に参加することは「他の大使から刺激を受けて自分を成長させる」という点で大いに実りのあることです。自分と異なるバックグラウンドを持った人は当然考え方も異なるので、自分の中での自明性を揺るがし、新たな視点を獲得することが可能です。自分を嫌いになる程見つめ直すことは辛いことでしたが、今から思えば強い衝撃を受けてできた「ほころび」を縫い直すことで自分が前よりも強化されていったと実感しています。

先述した模擬国連で得ることのできたスキルについて少し言及したいと思います。

まず、リーダーシップについて。リーダーとしてふさわしい資質は一つではなく、自分に最も適合するリーダー像を追求することが重要なのですが、圧倒的能力によって屹立するにしても、気の利いた発言で静かにグループの中核として存在するにしても、他のメンバーからリーダーだと認められなければいけません。そのため何が必要か、絶えず自分に自問自答し続けることになります。それが理由で辛いときもありましたが、追求し続ける価値のあることだと思っています。

次に、交渉力について。交渉において重要なことは相手に自分が利益を得たように「思わせる」ことだと考えています。どちらも winwin な関係というのは一方の戦略によって生み出されたもので、実際に交渉において利害関係は対立することがほとんどであると思います。つまり、winwin を目指そうとするのは交渉において不利にある側が、相手が交渉において自分が有利な立場にあることを気づかないうちに繰り出す先手として捉えることも可能だと思います。

この例はあくまで自説ですが、交渉の「戦略性」にも模擬国連の面白さがあると思います。

また、私は模擬国連という活動よりも国際問題について深く考える機会はないと思います。なぜなら自分が解決策を話しあう「主体」であるからです。国際問題について受動的な学習しかしてこなかった私は、この活動を通じて世界で今起こっていることに目を向けるようになりました。また、自分の発言や行動によって国際社会を変えることができるという「スケール」の大きな感覚を味わえる模擬国連活動は一度参加してみるとやめられない中毒性がありました。模擬国連とは、国際問題について多角的視点で捉えることができるようになると同時に、新たな知識を獲得できる活動だと思います。

さて、今回の模擬国連国際大会は、自分の模擬国連活動の集大成として臨んだ会議でした。長期間準備を行い、議題について深く考えているという自信があったにもかかわらず、苦しい会議展開となりました。周りの英語についていけない。相手の話していることに応答できないため自分のやり方が通用せず、ただ自分の意見を主張することしかできませんでした。さらに、自分が想定していた議論の展開とは全く異なった論点で話し合われることになったので、グループ内での議論からおいていかれました。持参していたホワイトボードを使って一時グループの意見を発表する代表としてスピーチをすることはできましたが、次第に存在感がなくなっていきました。そこで私はたとえ「聞く」ことができなかったとしても、「話そうとし続ける」という方針に転換しました。自分の政策を決議案に残すということを会議において最低限達成しなければならない目標としていたからです。そのために個人個人やグループ内で論点ごとに別れた小グループを回り、話し合われている内容について自国の意見を述べながら、自国の政策を説明し、同意を得ようと努めました。そして、グループ内の意見がある程度まとまったところで他の大使に質問をして必死についていこうとするようにしました。最後まで諦めないこと。顧問に言われたこの言葉によって、最後まで粘り、決議案投票前のスピーチを行ったところ、賞を受賞した大使から **Good Job!**と褒められたことはよく覚えています。最終的に決議案に自分の政策は残り、決議案も可決させることができました。

会議が終わって国際大会の長い準備期間や本番を振り返って、更にはこれまでの模擬国連活動全体を振り返って、これまでたくさんの人に

支えられて来たのだということを改めて強く実感しました。模擬国連に参加して自分の成長を実感できるような充実感を味わえたのは、模擬国連の仲間がいたからであり、そして何よりも先輩である自分にここまでついてきてくれたペアのおかげです。今大会では受賞を目標にしていたのですが、その目標は達成できず、悔しい思いをしました。しかし、本番に向け努力してきたことは無駄なことではなかったと前向きに捉える事ができました。

また、今回の派遣事業に参加させていただいたことはとても幸せなことであり、貴重な経験ができました。表敬訪問では、普段会えないようなグローバルに活躍なさっている方々に現場からの最先端のお話をいただき、模擬国連をやる上での情報を得る主な手段であるインターネットでは知ることのできないことばかりで、大いに勉強になりました。グローバル・クラスルームの皆様、そして ACCU の皆様を始めとしてこのような素晴らしい機会を作ってくださった方々にこの場を借りて感謝を申し上げたいと思います。



高田 陽一郎

浅野高等学校 2 年

「どうして模擬国連をやっているんですか？」

私はこう聞かれるときいつも「楽しいから!」と答えます。模擬国連は大使として国際問題を解決しようと交渉する活動ですが、私にとっては「不可能を何度も打ち破る場」でした。具体的には水口先輩と組むなんて不可能だ、釣り合わないと言われていたことから始まり、全日で賞をとるなんて不可能だ、までです。

私は中学 3 年生の時から模擬国連をやっていますが、思い起こせばいつも失敗ばかりでした。グループを作って 1 時間で気づいたら乗っ取られたこと、英語ができずオープニングスピーチで笑われたこと、練習会で議長をやって大失敗したこと。自分は模擬国連に向いてないんじゃないかと思ったことも何度もありました。しかしそのたびにどうしたら次に同じようなことが起こらないか考えて実行することが楽しすぎて、気づいたら高校生活の半分を費やしつつあります。

水口先輩との最後の会議であった世界大会の議場について振り返りたいと思います。私たちは国連の第 3 委員会では政治犯と表現の自由について議論しました。全体として、日本で行ってきた模擬国連とは全く違う会議でした。100 人以上参加しているにもかかわらず、まるで学級会のような和気あいあいとした政策検討会でした。

1 st session では突然議長が論題の解説をはじめ、その後 opening speech をまわすだけで 3 時間が終わってしまいました。

2 st session でもアンモデが始まる気配がなく、議場全体がしびれを切らしていたので、それを逆手に取り他の大使とメモを使って感情を共有しグループ形成を行いました。その後、自分たちの強みである大きなホワイトボードを使った内政を進め、議場の中で目立つことに成功しました。しかし、ここから自分たちと外国人との間で差が生まれ始めます。自分たちはそれぞれの論点について全体で細かく話し合う予定だったのですが、周りは論点を 4 つに分けて、それらについてグループディスカッションを行うことで政策を立てようとしていました。しかし自分たちが用意してきた政策はその論点以外のアプローチや包括的に問題を解決しようとするものばかりでした。その結果 4 つのグループ

に振り回されることになり、英語の壁も相まってグループの中での存在感が薄まっていきました。

さらに私は 2st session 後に外人の話す英語に恐怖を感じるようになり、それを 2 日目も払拭できず一大使として終わってしまいました。悔やんでも悔やみきれないです。しかしペアはこれで終わっていませんでした。私が呆然としている間にも水口先輩は政策をなんとか DR に入れ込もうと必死にグループを回ってくれていました。結果文言を入れることができ、最後にまるでグループリーダーかのようなスピーチ（日本だったら絶対に引かれています）まで行い、周りから賞賛を受けました。ペアがいなければ大使として最低限の活動も行えなかった自分が不甲斐ないですが、同時に本当に感謝しています。

今回の派遣を通して得た最も大きなものは自信です。自分は 1 つのことにここまでやりきったんだという達成感。「高田は自信がいつもなさそうだ」と顧問の宮坂先生にいつも言われていたからこそ自分にとってこれは 1 番の収穫です。政策も今まで自分が作ってきた中で一番納得のいくものができ、どんな苦境もなんとか乗り越えることができました。

最後になりますが自分たちをここまで支えていただいた宮坂先生、12 期のメンバー、各学校の顧問の先生方、ACCU の河口さん、グローバル・クラスルームの大学生の皆様など派遣に関わった皆様に本当に感謝しています。本当にありがとうございました。



山田 健人

海城高等学校 2 年

5 月 11 日、12 日。それは、私にとって、長く続いた暗闇に、一条の光が差した 2 日間となりました。

模擬国連を始めてから 6 年近く経ちます。国際大会までの約半年間は、これまでの模擬国連キャリアの中で経験したことのないほど、辛いものでした。議題や担当国についてのリサーチ、配布資料の作成、スピーチの練習など、作業量は膨大でした。しかしそれよりも、考え続けなければならない、かつ、いくら考え続けても、当日うまくいく保証は全くない、という事実は、私を大いに苦しめました。提案する政策を考えては欠点を見つけ、議論の内容を想定しては違う側面が浮かび上がり、その都度対応を考えるうちに、何のために努力するのが分からなくなってきました。しかし、中途半端な努力では、お世話になってきた方々、全日本大会の他の参加者に申し訳ないと共に、今まで努力してきた自分、大きなチャンスを逃したことになる未来の自分に謝らなければならない、と思い、妥協するわけにはいきませんでした。

先が見通せず、諦めそうになる中でも、私はある強い信念だけは失わずにすることができました。国際大会は、猛スピードでまくし立てるアメリカ人、他国の参加者の予想できないような行動、日本とは違う議長団の仕切り方など、衝撃的な出来事が多いと聞いていました。私は、逆に、日本の模擬国連経験者として、あるいは、日本人として、国際大会の他の参加者に衝撃を与えたいと思っていました。

日本の模擬国連のレベルは高く、それが世界に通用しないはずはないと考えました。そこで、議題や担当国についての綿密なリサーチ、議場で非公式に配る資料の作成など、日本の模擬国連経験で行われる準備を徹底的に行いました。その上で、これらの準備や戦略を会議に活かすには、他国の参加者に考えを正確に伝える能力が必要不可欠であり、また、国際大会はスピーチをする機会が多いため、考えを印象的に伝える能力も必要です。しかし、私の英語能力は、自分の意思を自由自在に伝えられるほどのレベルには到底達しておらず、どうしてもつかえてしまう自分に焦りを覚えていました。そこで、全日本大会直後から、政治家等による英語のスピーチを聞き、覚えたものを発音する練習を毎日繰り返しました。

こうして私は、ここまで準備してきたのだから、本当に他国の参加者に衝撃を与えられたら、という淡い期待を抱いてニューヨークに向かいました。

会議当日、淡い期待が確かな手応えへと変わりました。日本の模擬国連、あるいはこれまでの日本での自分の人生を通して培って来たことが、確かに活かされたのです。各国大使が自由に立ち歩き、多くの場合グループを形成して話し合う非公式討議の場面では、他のグループは一握りの国が自国の意見を激しく言い合い、話し合いがなかなか進まない中、ウルグアイが中心となったグループでは、一カ国ずつ全ての国が重要な主張を述べたあと、それらを分類し、分野ごとに話すことができました。要所でそこまでの議論をまとめたり、成果文書の案を転写したものを共有したりして、全員の同意を取りつつ進めることができました。この結果、最後まで、議論の主な要点を簡潔にまとめられる状態にあり続け、また、多くの国の意思を反映した包括的な決議案を作成することができました。日本では全員の意思をなるべく尊重するのが当たり前ですが、こうした意思決定の方法が他国の参加者相手に通用するのか不安に思っていました。しかし、他のグループで話す機会を得られなかった参加者がウルグアイのグループに加わったり、また、グループ内の大使から、「こちらのグループは全員意見が反映できて良い」という声が上がったりするなど、概ね評価されました。また、日本では時間を守ることが当たり前ですが、成果文書の提出期限を過ぎても作業を続ける大使がいる中、ウルグアイが中心となったグループは提出期限までに提出し、余裕を持って交渉を続けることができました。

そして課題であったスピーチも、確かに発音や流暢さでは英語ネイティブの参加者に劣りましたが、英語が下手なりに伝わりやすいスピーチを数多くこなすことができました。十分なリサーチと準備がなければ言うことができない統計資料や決め台詞を織り交ぜつつ、トレーニングの成果で、場面に応じたスピーチをすることができました。レーガンの就任演説に起こされる朝、ブツブツつぶやいていた登下校中、オバマやコフィー・アナンのスピーチを聞きつつ寝てしまう夜—こうした努力がようやくと実を結んだのです。

国際大会までの苦悩、努力は決して無駄ではなかったと強く感じることはできたのは、何よりも、会議が楽しかったからです。もちろんうまくいかない部分も多々ありましたが、そうし

た場面でも、価値観の違う他の国の人と、同じ問題について熱心に議論するのが楽しくて仕方がなかったのです。この2日間のためならば、苦しい時間をもう一度過ごしても良いと、自信を持って言えるでしょう。そして閉会式で、参加した議場の最優秀賞としてウルグアイの名前が呼ばれた時よりも心から嬉しかったのは、例えば、他の大使から褒められた時、あるいは、決議案の提出時のスピーチを終えて互いに拍手を送りあった時、そして、担当国の立場の違いに拘らず、多くの大使から”Kento”と呼ばれた時でした。

今大会は私にとって模擬国連活動の締めくくりとなりました。会議終了後、議長からのコメントのメモを取りつつ、次の会議はないのだとふと気付き、微かな寂寥感を抱く自分がいました。

苦しい準備期間に比べると喜んでいられる時間は非常に短かったです。私は次のステージに進みます。しかし、どんな場面に遭おうとも、この国際大会で見出した確かな希望が、自分を前に進めてくれることだろうと思います。

末筆ながら、派遣事業を支えてくださった多くの方々へ、心より感謝申し上げます。



石川 満留

渋谷教育学園渋谷高等学校 2年

5月12日、13日の二日間ニューヨークで開催された、高校模擬国連国際大会に出場し、優秀賞を頂きました。まずはこのような貴重な機会をご支援してくださった ACCU をはじめとしたスポンサーの皆様、ならびに昨年11月の全日本高校模擬国連大会から支え続けてくださった先生方、先輩、友人に深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

私とペアの長谷川えみ里はウルグアイ大使として社会保障問題の議題で ECLAC(ラテンアメリカ経済委員会)の会議に参加しました。ラテンアメリカに根強く残る貧困層の“非社会保障状態”、それによって解決の糸口が見えないジェンダーの不平等性、さらにこの悪循環の追い風のような移民問題など、切っても切り離せないこれらの問題に対し国益を踏まえつつラテンアメリカとしてどんな共通見解を出し、いかに包括的で現実的な解決策を見出していくのかに注力してきました。私たちは、Information Database という各機関と政府の協力によって収集した個人単位の情報統括システムの導入による社会保障制度の普及率の調査、また各機関にアクセスができない Informal Sector(非公式経済者)の把握と正式経済を促すことを目的とした税システム、Monotax の導入を主な政策として掲げ、地域内の脱税の慣習の根絶と教育の促進を含めた包括的な方針がいかに今のラテンアメリカに必要なのかを考えました。

会議初日は、予想に反した全体の国数と先進国を中心とした地域外加盟国が多かったことで、ラテンアメリカの地域益を強調しながら地域を先導して行くことを最大の目標としました。各国が用意してきた政策の共有で議場が混沌としていた場面でも常に、何をまず焦点におくかなど根本的な問題に立ち返り冷静になることに努めました。また日本の高校模擬国連と大きく異なり、初日は特に議事録に残るモデレートコーカスがとても多く、残らないアンモデレートコーカスがとても少なかったので、公式発言で限られた時間内にいかに進行中の話を簡潔にまとめ、かつ効果的に議場に訴えかけられる力が問われました。そこで臨機応変性が大きく問われ、注意深くかつ迅速な対応ができるように心掛けました。

会議二日目は初日に提出された二つの作業文書が合体(マージ)することが決定していたので、いかに地域重視の文言にしないといけないのか

を強調するのに、初日より慎重になりました。また、どのように政策を実現して行くのか、例えば財源はどこからくるのか、各システムをどのように導入するのかを詰めて話し合いました。ですが、会議の時間や先進国側の勢いが強く決議案がラテンアメリカには属さない先進国2カ国から提出されてしまったこと、また国際会議の特徴である、手書きの決議案の作成であったことから全体での丁寧な文言確認が実現できなかったことなど至らなかった点も残りました。しかし、私とペアは普段、地道に積み上げる外交とボトムとトップを定める内政を繰り返すことで、異なるグループ間の落とし所や妥協点を見つけることを得意とし、お互い別々の行動ができるのですが、国際大会では見事に連携することができてとても嬉しかった上に今までの努力を発揮できてとても良かったです。

今大会に参加して改めて感じることは、賞の受賞に関係なく文化の違いからくる異なった価値観の中で会議に出席したこと自体が貴重な体験であり、得るものが多かった機会だったと思います。私は実のところ会議が終わって数日たった頃も、会議に出た時の緊張感などを思い出して数多の感情からなる涙を流すことが多々ありました。大使一人一人に丁寧に交渉を働きかけ着実にコンセンサスを目指して行くという、自分が目指す大使像に合致した会議行動ができたことに対する安堵感、優秀賞という有難い受賞に対する達成感とともに、どこか心残りのある会議であったことに対する悔しさを同時に抱きました。この入り混じった感情は、世界という不慣れで刺激的な環境でこそ味わえたものであり、大変貴重な経験をしたのだと痛感しています。模擬国連はもちろん国際情勢や、各国のスタンスの違いなどを学ぶことができて、ものごとの真髄を追求することができる素晴らしい活動です。しかし国際大会でより明確になった私にとっての「模擬国連」は、自分はどのような人なのか、どのような場面で積極的に行動し、どのような場面で尻込みしてしまうのかなど実際に人に囲まれてみないとわからない映し出された自分の姿を直視するものだと感じます。特に緊張と常に隣り合わせの状況で自分を知ることは、自分の得意不得意を明確にし、見直そう、向上しようという意欲を持つことができました。辛いことも多かったですが、その分客観的に見ることができたのかもしれません。

国際大会に参加したことで、俯瞰的に物事を捉える重要性を実感し、自分にとっての模擬国連の意義を再考する機会を得ることができまし

た。模擬国連であつても何であつても、何のために自分は頑張るのかを見つけ出すことは、自らの行動の価値を高めるだけでなく、モチベーションの向上にも繋がります。私はこれからの人生において俯瞰的に意義を捉える重要性を模擬国連、特に国際大会を通して学べたと思います。そして何より、類似した辛さやもどかしさを味わっている分、苦勞していることを汲み取ってくれ寄り添える、ペアをはじめとした日本派遣団の仲間との出会いがかけがいのないものとなりました。

国連本部の総会議場に足を踏み込んだ瞬間、胸にグッとくるほどの圧倒感と荘厳な雰囲気を感じられ、今もそしてこれからもあの感触を忘れることはありません。世界には多くの価値観や意見が混在し、その中で均衡と平和を目指そうと日々解決策を練っている団体が数多く存在します。国際大会は、立ち止まってはられないという私への警鐘でした。未だ限られたコミュニティに属する私は、視野を広げる機会をこれからも得ていきたいです。



長谷川 えみ里

渋谷教育学園渋谷高等学校 2 年

自分にとって夢の舞台であった模擬国連国際大会。半年間に及ぶ準備を経て迎えたこの大会が終わってしまったということに、未だ実感が湧きません。ここ数ヶ月、毎朝起きて一番に模擬国連のことを考えていたほど、私の生活は模擬国連を軸に回っていました。今回の派遣は、悔しさに伴う、数々の学びがありました。それら一つ一つに向き合うべく、昨年から続いた全米までの道のりを振り返ってみたいと思います。

まず、昨年の 11 月にあった全日本大会では、自分の模擬国連スタイルを確立する貴重な気づきがありました。それとは、深いリサーチと思考に裏打ちされた自信さえあれば、会議で自分のビジョンを訴え続け達成できるということでした。議題であった「ジェンダー平等」は、国の伝統や宗教が根底にある非常にデリケートなものであった為、ペアと共に何度も議題を突き詰め、現状の何が議論の進展を妨げているのか、何が達成できれば国際社会にとって前進といえるのか、といった真の問題解決に繋がることを深めました。その結果、自国の主張に揺るぎない自信を持ち、グループを代表した際も、終始堂々と主張することが出来ました。この経験は確実にニューヨーク大会の準備で活きてきました。「弱者の為の社会保障の強化」(Strengthening Social Protection for the Most Vulnerable) という、広範な議題で、貧困層、女性、子供、難民と対象が広く、打つべき手がありにも多くある中、ラテンアメリカの実情を調べ続けました。途上国において、限られた資金と能力の元、いかに優先順位をつけ、効率的な政策を立てるべきか。これが今会議の核心になると考えました。現在、あらゆる社会保障制度が存在しているにも関わらず、一つ一つが噛み合っていなかったり、本当に必要とする層の人々に行き渡っていなかったりという、社会保障の政策そのもの以上に、それらのガバナンスを問題視しました。

このように政策と主張を組み立てて迎えた会議当日。想定とは全く異なる議場設定に唖然としました。ラテンアメリカ諸国を中心に 45 カ国いるはずでしたが、実際主席したのは 12 カ国のラテンアメリカ以外の先進国ばかりでした。そして、初日の前半は、Moderated Caucus

(着席討議)が立て続けに行われ、自分の慣れていた模擬国連とは異なる進行に戸惑いました。まるでディベート大会かのように、凄まじい勢いの英語で話され、自分以上に国際関係・国際問題の知識に富んだ現地の高校生達や、彼らの議論の早いテンポに飲み込まれそうになりました。反面、膨らむ一方でまとまりのつきにくい議論に気づき、日本から持参したホワイトボードに各国の意見を可視化出来たことが、数少ない地域の一国としての存在感を発揮することに繋がりました。グループをまとめる時は一国一国を尊重し、丁寧な合意形成を心掛けました。その一方で、驚きの速さで Working Paper (作業文書) を書き上げた先進国のグループが、突然コンバイン(他のグループとの意見統合)を押しかけてきました。完全に先手を打たれてしまい慌てている中でも、グループ内の意見のまとまりを大切にし、コンバインは 2 日目までなんとか先伸ばしてもらうことが出来ましたが、結局先進国グループの WP をペースにすることに決まりました。そのグループと重複していない私たちの主な政策は盛り込まれましたが、そのドキュメントは私たちに渡ることなく、速やかに提出されてしまいました。成果文書の完成版を見たのは、投票直前になってからでした。地域の現状を地道に分析し、実行プロセスまで綿密に検討していた私たちの政策は多少含まれていたものの、メインな主張は先進国の国益に直結するような政策ばかりとなっていました。議題の「社会保障」とは、その国が主体となっていく必要があるべきと考え、当事国の現状を直視した政策でなくてはいけないと主張しました。何度も議場で訴えたものの、共鳴してくれる国はいませんでした。主導権を先進国の強い国々に握られてしまった結果、ラテンアメリカ地域の発展を目指した議題であるにもかかわらず、当事国としての貢献が十分できなかった自分を情けなく思いました。そして、先進国のリーダーが半ば強引で、積極的に発言できずにいた他の大使のことをあまり尊重せず進めていたのです。

しかし、そこで諦めるわけには行きませんでした。DR 作成に手をつけられなくても、何とか全カ国を巻き込んだ会議を作りたいと思い、取り残されていた国に個別のアプローチをかけました。また、議長の協力を得てより多くの大使の主張にも耳を傾けるよう、呼びかけることに成功しました。その結果、提出された DR は私たちにとって最善な形ではありませんでした

が、多くの国からの信頼を得ることができ、自分が今まで信じてきたやり方、どんな小国も尊重し、丁寧に合意を図る、常に本質的な議論を心がけ最後まで諦めず会議を終えるという模擬国連を、最後まで貫くことができ心から安心しました。

この経験で私が学んだこと、それは先ず「仲間・同士の大切さ」です。これは準備段階から会議行動まで、模擬国連の全側面において言えることだと思います。準備では、膨大なリサーチを重ねても、納得のいく答えに辿り着けなかったり、今まで正しいと思っていたことが否定され、立てていた政策が揺らいだりということは頻繁にあります。しかし、それでも諦めずに継続できたのは、いつかは答えが見えて来るだろうという自信と信頼があったからです。全日では、思うようにリサーチが進まず、ペアと共に沢山の壁に突き当たりました。しかし、その分何かが見えた時に共有した達成感は、かけがえの無いものでした。その経験が、今回の準備でも私たちの大きな原動力になりました。

勿論会議本番でも、仲間の重要性を痛感しました。前述した通り、自分の主張に共鳴してくれる大使、全日の時にビジョンに共感し協力してくれたような仲間を見つけることができませんでした。先進国のスピード感に張り合うのが精一杯で、一国だけでは多数派の雪崩のような勢いに歯止めをかけ、会議の流れを作り出すのは難しいと身に沁みて感じました。裏を返せば、模擬国連を成功に導くには、自分の主張に共感してくれる仲間を募ることが、欠かせないということです。いくら知識を持っていて、弁が立ち、自分のビジョンに自信があっても、協力できる仲間がいないと達成できることは限られてきます。そして、自国の理念に共感してもらう為には、論理的な説得力ももちろん重要ですが、時にはそれ以上に、地道に信頼関係を築く人間力が欠かせません。これは、模擬国連に限らず、現実でも言えることだと思います。周りの意見に耳を傾け、自分の主張を丁寧に伝えようという熱意、他人を惹きつける人間的な魅力がなければ、本当の意味でリーダーにはなれないということを改めて実感しました。

模擬国連は、「国際問題の議論」以上のものがあります。国と国の利害の衝突がある中でも、地道なコミュニケーションによる相互理解を図ることに醍醐味があると思います。そし

て、誰か一人が会議をつくるのではなく、会議を構成する全カ国の貢献が必要となります。その為、他の大使と関わる中で、信頼を寄せてもらえることほど、幸せなことはありません。全米大会に参加することは、自分が今後どのような大使になりたいか、延いてはどのような人間になりたいかが、少しずつ見えてくる経験となりました。悔しい思い、やり直したい気持ちは今でもありますが、それがあるからこそ次に進めると思います。この経験を糧に次の目標に向かって行きたいです。最後になりましたが、この派遣を支えて下さった全ての方に心から感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。



橋本 京

頌栄女子学院高等学校 3年

気がつけば、あっという間に国際大会も終わってしまい、笑いあり涙ありの3年間の模擬国連ライフは幕を閉じてしまいました。模擬国連を通して、私は数えきれないほど多くのことを学び、大使としてだけではなく、人間としても、ひとまわりもふたまわりも成長しました。この報告文ではその集大成となった国際大会を振り返ってみたいと思います。

まさに元田・橋本ペアは一日にして成らず、でした。初めて組んだのは中学3年の夏の会議で、模擬国連を始めたばかりの二人は会議の進行方法でさえきちんと把握していませんでした。知識と経験不足だった私たちは周りの大使に圧倒され、ほとんど議論に参加することはできませんでしたが、会議が終わった時、私たちの中には共通した、“悔しい”と“面白い”という2つの強い思いがありました。火がついた私たちはその後何度も失敗し、何度も挫けそうになりながらも、沢山の会議に参加することで少しずつ大使としてのスキルを磨いていきました。

そうして切磋琢磨しながら、私たちの交渉のスタイルを作り上げて行くことができました。私は内政、ペアは外交。一人一人の大使との丁寧な交渉に力を入れ、限られた人しか参加することのできないような夜間交渉はしないようにしました。また、会議がどんな結果になろうと、最後まで諦めずに大使としてできる限りのことをやりきるスタミナを身に付けていきました。結果このことが評価され、全日本大会で優秀賞を受賞することができたのだと思います。

国際大会まで5ヶ月間、会議の準備を最優先に毎日を過ごしました。議題がとても専門的であったため、膨大な量のリサーチをし、抜け目のない政策立案に多くの時間をかけました。会議前は、何が起きるか分からない、漠然とした不安に駆られながらも、今までやってきたことを信じようと自分に言い聞かせ、大会に臨みました。

会議一日目。序盤から予想外のことが起きました。リサーチをしても行き当たらなかった論点の一つ設定されたのです。**Moderated Caucus**（着席討議：モデ）のみで行われた**1st Session**では何度か発言する機会はあったものの、議論は主に私たちが調べられていなかった論点にフォーカスしており、それについて私たちは全く意見を言うことができませんでした。

2nd Sessionの**Unmoderated Caucus**（非着席討議：アンモデ）でなんとか集めた数カ国は大きなグループのリーダーにどんどん引き抜かれて行ってしまう、2度目のアンモデの終わりにグループは消滅しかけていました。その時は辛くて泣き出しそうになりましたが、なんとか自分を取り戻し、グループ代表としてではなく、ウルグアイ大使として他のグループとの交渉に当たりました。しかし、国際大会の交渉のスピードは異常に早く、国数が足りて**Working Paper**（作業文書：WP）を書き始めているグループにはなかなか意見も聞いてもらえません。途方に暮れていたその時、思いもよらぬことが起きました。私たちが持ってきた政策に関する論点についてモデを行うことを議長が提案したのです。すると議場全体が私たちの意見に耳を傾けてくれるようになり、ウルグアイの存在感を出すことができたのです。その後は比較的交渉もスムーズに行くようになり、**2nd Session**の終わりには私たちの意見を積極的に取り入れてくれるグループに入り、その**WP**に自分たちの条文をすべて入れることができました。

最後はグループに入ることができたものの、あまりにも思い通りに会議がいかなくて1日目の終わりは身も心も崩れそうな思いでした。しかし、ここまで落ちたらもう這い上がるしかない私たちを決心し、2日目に備えました。

そうして会議2日目は気持ちを入れ直し、**WP**提出と**Draft Resolution**（決議案：DR）作成に当たりました。まわりの国も私たちの頑張りを認めてくれたようで、グループ内の全員がウルグアイをスポンサー国にすることに賛成してくれました。最後コンバイン交渉を行った際は、枠が少なかったためスポンサーにはなれませんでした。が、**Draft Resolution**が採択された時、私は十分会議に満足していました。1日目の状態から2日目はやれるだけのことはやった、と自信を持って言えたからです。なので、優秀賞を発表した時“Uruguay”と聞いた時はとても驚きました。他にもっと素晴らしい大使は何人もいたのにどうして自分たちが受賞できたのか。閉会式の後、フロントに受賞理由を聞くに行くと、そのような問いに驚きながらも誠実に答えて下さいました。「君たちは他の大使の意見をきちんと理解しようとしていた」「大使としての態度や姿勢が今まで見たことないほど素晴らしかった」こんなに嬉しい事があるのでしょうか、私たち、元田・橋本ペアの交渉スタイルが世界で通用したのです。

国際大会で一番印象に残っているのが、2日目最後に行った感想会です。話すチャンスをもった私は、「私たちは飛行機で13時間かけて、この会議のために日本から来ました」というと、大きな歓声と拍手が議場全体から湧き上がりました。私はこれに感動してしまい、言葉も出なくなってしまいました。世界中の高校生の計り知れない器の大きさと優しさを身に染みて感じ、このような大使たちと一緒に会議ができたことをとても光栄に感じました。優秀賞という形で認めてもらえたのはとても光栄なことですが、私にとってはこの事の方が掛け替えのない思い出として胸に深く刻まれています。

私は今回の派遣を通して、自分と同じ経験をもっと多くの高校生にしてもらいたいと思いました。少しでも興味がある人は、最初から諦めないで、とりあえず挑戦してみてください。私も去年の今頃、一年後自分がここまでこれると思っていなかったのですが、小さな努力を積み重ねてきたことでこれを可能にすることができました。やらないで後悔するよりやってみるべきです。まずは自分の可能性を信じてみてください。

最後に、私は決して一人でここまでくることはできませんでした。3年間、辛いことも嬉しいことも一緒に共有し、共に戦ってきたペアの元田さん。何度となく心が折れそうになる私たちペアを励ましなが、間違っ方向に進んだときは優しく導いてくれた顧問の飯島先生。そして家族、先輩方、友人をはじめとした多くの人の支えがあつて今の私がいます。また、今回共に渡米し、派遣のサポートして下さったグローバル・クラスルーム日本委員会の大学生3人、ACCUの河口さん、各学校の引率の先生、心の底から尊敬する素晴らしい12期派遣団のみんな。この活動を支援するすべての方に対し今一度、深く御礼を申し上げます。



元田 有香

頌栄女子学院高等学校3年

この世界大会が私にとって最後の模擬国連活動でした。中3で魅了されてから続けてきた模擬国連を通して、数え切れないほど多くの大切なことを学びました。

この報告書では、どのような心境で世界大会の会議に臨んだのか、会議を終えてどのような変化や発見があったのかなどを書かせていただきます。

会議1日目は空振りの連続でした。前半では最初に作ったグループが空中分解して、どこのグループにも入れずにいる状況でした。大声で被せて話す大使たちに発言が掻き消され、次第に思うように発言できない自分に自信もなくなっていきました。その自信のなさが周りからも見て取れたのか、交渉にも応じてもらえませんでした。挙げ句の果てに、身長2メートル近い大使に背中ブロックされ、背伸びをしても前も見えず、という絶望的な状況でした。発言することが怖くなり、自分から話しかけにいくことも躊躇するようになってしまいました。そこからは、正直あまり記憶がありません。ただ、諦めてはいなかったのも、機会があれば何度もスピーチをしました。

1日目が終わり、派遣団の集合場所のロビーに戻った瞬間、どうしようもないほど悔しくて、悲しくて、涙が止まりませんでした。その日の夜、落ち込んだままホテルの部屋に戻り、大学生の方にいただいたメモを読みました。そこには「2人は正しい道を歩んでいるから、自信を持って。もう少し自分たちのためにも、かっこつけずになりふりかまわず、がむしゃらにやってみて。」と書いてありました。ふと冷静になり、泣いても笑っても明日で終わりだ、このままで終わらせたくない、と思いました。

1日目の悲惨な状況の中でも、一つ希望がありました。会議の終盤で議長が私たちの政策を支持してくれたのです。議長の権限が強大なこともあり、一気に風向きが変わりました。議場全体の注目が私たちの政策に集まり、公式発言でも説明する機会が与えられ、政策を聞きに来てくれる大使もいました。

何かが吹っ切れ、当たって砕けてもかっこ悪くてもがむしゃらにやろう、とペアと誓い合って臨んだ2日目は自信がありました。そのため、何があっても諦めずに、他の大使へのリスペクトを持って必死に動きました。また、1日目は忘れてしまっていた、日本の模擬国連で大

切にしてきたことを実践しました。スピーチ中は作業をせずに聴く、交渉で合意に成功しなくても交渉に応じてくれたことへの感謝の気持ちを忘れない、メモまわしをしてくれるスタッフの人への感謝の言葉を忘れない、スピーチで一番メッセージを伝えたい相手の目を見る、一人一人と真摯に向き合う、などです。

ペア間での役割分担も徹底しました。2人が同じ仕事をしないように、互いにペアの動きを確認しつつ、内政・外交でわかれるなど、その場その場で自分が出来ることを探して動きました。議場全体を俯瞰し、全員が一つの輪の中央に行こうと押し合いをして議場が混乱している時などは、あえてその輪の外に出て議論についていけずに椅子に座っている人たち一人一人に修正案の内容を説明してまわりました。会議後半には心を開いてくれる大使が増え、次第に皆が協力し合えるような温かい議場になっていきました。育った国や文化が違っても同じ高校生であることに変わりはなく、模擬国連に携わる「仲間」なのだと感じました。最後までペアと互いに信じ合い、がむしゃらに動き続け、最終的に優秀賞をいただくことができました。会議後、議長と会議監督に「あなたたちほどのdignity（尊厳、気品）は今までの大使の中で見たことがない」という言葉をかけてもらえた時はこれまで積み上げてきたことを認めてもらえたようで本当に嬉しかったです。

これから模擬国連に挑戦する高校生にお伝えしたいことが3つあります。

1つ目は、英語についてです。私は渡米前、完璧でない英語を使ってネイティブスピーカーと交渉することに「対等に交渉できるだろうか、密度の濃い交渉ができるだろうか」など不安がありました。しかし、今回気付いたことは、もっと肩の力を抜いて良いということです。日本語は基本的には日本人にしか使われないため、完璧であることが前提です。そのため、同じ感覚で海外に行くと英語を話すことにプレッシャーを感じてしまいます。実際に私は自分で壁を作ってしまった。しかし、英語は広く使われている言語であり、様々なレベルに寛容です。完璧に話せないことを馬鹿にする人はいません。むしろ、母国語ではない英語を話そうとする努力を好意的に評価してくれる人がほとんどでした。完璧な英文を頭で組み立ててから話すことよりも、言葉につまりながらも、とにかく話すことに意味があるのだと思います。伝えようとする気持ちがあれば、真剣に耳を傾けてくれます。相手がネイティブス

ピーカーであればなおさら、汲み取ってくれます。よく聞く話ではありますが、本当にそうなのだと身をもって実感しました。

2つ目は、リサーチの大切さです。一国を代表する大使として、自分の国のことを熟知する責任があるのはもちろんですが、リサーチをすることの意味はそれだけではありません。リサーチを通して得られる、この議場で担当国について自分が一番詳しい、という気持ちは自信に繋がります。同じように、他国については他国の大使が一番詳しく、一人一人をリスペクトしようという気持ちも持つことができます。また、どうしようもない状況になった時に状況を打破し、逆境を乗り越える手助けになってくれることもあります。

3つ目に、人との繋がりで。私が模擬国連に魅了された理由の一つは、常に向上心を持って努力し、様々な魅力に溢れている模擬国連の仲間に出会うことができたことです。

一人一人が私にとって憧れの存在であり、この3年間で出会った素晴らしい人たちとの繋がりは、これからもずっと大切にしていきたい一生の財産です。どんなときも、人との出会いを大切にしてほしいと思います。

最後に、このような素晴らしい経験をする機会をいただけたことに、心から感謝申し上げます。この活動を支えてくださった皆様、グローバル・クラスルーム日本委員会の皆様、顧問の飯島先生、そして中3から今までずっとペアでいてくれた橋本さん、本当にありがとうございました。このすばらしい活動がこれからも続いていくことを切に願っています。



永見 大智

桐蔭学園中等教育学校 3年

高校模擬国連最後の会議をニューヨークへの派遣と国際大会を通して出来たことを心から感謝いたします。派遣中、色々な方々に支えられてこの派遣が成り立っているということを様々な場面で感じ、一模擬国連にこれまで参加してきた高校生として本当にうれしく思います。

しかし、何よりの心残りはこの報告書で良い結果をお伝えできないことです。表敬訪問中には様々な刺激を頂き、会議中に幾度となく心が折れそうになりながら最後までやり切ったことは必ず将来の糧となると確信していますが、一つの明確なゴールに到達できなかったことは応援してくださった方々や後援してくださっている方々に申し訳なく思います。

せめてものこととして、会議での経験を出来る限り詳細にまとめたいと思います。

まず初めに終わった今一番感じることは、恵まれた環境で会議が出来たということです。事前に聞いていたように背丈で威圧してくる大使は居ませんでしたし、語調を強めて圧倒してくる大使も居ませんでした（状況によってはかなり早口での議論もありましたがあくまで紳士的な姿勢でした）。またフロントも強引な進行もなく、時に介入して議論の方向性を示しましたが、あくまで各大使の自由を尊重していました。そのなかで「負けた」ということに自分の力不足を強く感じます。

会議の準備にあたり、最も考えたのは「安全保障理事会」という議場でした。本来と同様の 15 か国という設定で（当日は 11 か国でした）、どのような議論になるのかということに一番悩まされました。これまでの派遣団の先輩方から色々なアドバイスを貰う中で、ディベーターのような大使やかなり早い議論、拒否権に関する駆け引きを予想し、自分は留学経験がなかったので、どのように戦うかを考えました。政策に関しても、多くの参加大使はリサーチをかなりするわけではないという話を聞き分かりやすさに比重を置き、15 か国ということで極めて速い議論を予想し、最終的にまとめる土台として、担当議題である「選挙監視」を実行していく主体に関して詰めました。結果、国連と NGO や地域機関とのかなり具体的な連携に関する政策を立て、一つひとつの具体的な「選挙不正」の例や問題に関するウルグアイとしての立場を固めながら、包括的な「主体」に関する政策と具体的な「選挙

不正」に関する政策を作り、最終的に「主体」に関する議論に持ち込もうと考えていました。

15 か国のため、多くの回数スピーチが当たることを考え事前にいくつか原稿を用意しました。また、スケッチブックを 3 つ持ち込み、政策を分かりやすく 3 ステップにしたものを貼るなど、議論をまとめられるように準備して当日に臨みました。

しかし会議が始まってから私たちを待っていたのは、予想を上回るまわりの大使のレベルの高さでした。1 日目の最初はモデのみが続き、ウルグアイとしての政策をしっかりと発表しながら、議論の中心にいられたように感じます。ただ徐々に議論が加速すると一つの具体的な問題について深く議論するようになり、かなり専門的な議論が始まりました。自分達もしっかりとリサーチをしてきたので、議論の内容は理解できましたが、当初そのレベルの議論が起ることを予想していなかったもので、次第に発言の回数が減っていきました。最初は「いいスピーチだったね」という内容のメモが回ってきていましたがそれもだんだん来なくなり、議論の方向性を変えたりまた別の角度からの意見をしたりしようにも自分の英語力では上手く発言できないような複雑な議論が行われるまでに至っていました。隣の席のアメリカ大使とは、始め対等に情報交換をし合っていたのですが、次第に彼が発言の合間に会議に持ってきていたバインダーで閉じた資料にチェックを付け、論文や BG、他の資料から発言をしていく姿に気圧されるようになり、効果的な発言が自分に出来るかと自信を失い始めました。会議の最後には作業文書の作成に入り、これまでのモデからアンモデになり自分達が議論の中心に戻る機会が来たと思いましたが、他の大使が用意してきた文言は論文を根拠にしてきたものもあるなど専門性が高く、議論はよりスピードが速くかつ複雑なものとなりました。結局、議論に参加しながら文言と自国益が相反しないかを考えるのみとなりました。今振り返ると会議を通して一番発言が出来ていたのは 1 日目の昼前の議論でした。所感としては、少し言い過ぎかもしれませんが、英語での全日本大会という印象でした。

1 日目が終わった後にはペアの渡邊共々何をどうしたらいいか分からず、GC の先輩方や先生に励まされ、もう一度気合を入れようとしましたがしたものの、上手く気持ちを切り替えられ

ず寝ることにしました。1日目の最後には、アメリカの大統領選挙に関するロシアの介入についての議論となり、アメリカ、メキシコ、カナダの高校生が多かっただけにより一層専門的な議論となり、議論を理解するだけで精一杯で流れを変える発言や同意以外の意見を言うことが全く出来なくなっていました。ネイティブの当然の英語の上手さ以上に、言葉選びや比喻を多用して、議論をコントロールする姿に自分が英語の議論でどうすればよいのか分からなくなりました。

2日目の朝は気持ちを切り替えぶつかっていきこうと思い議場に入り、最初は1日目の作業文書作成の続きからそれを成果文書に変えていく作業となりました。夜間に作業文書に不足しているとフロントから指摘のあった文言を用意し組み込みましたが、他の大使達が同様に夜間に練り直してきた文言もあり、各政策を確認しながら、問題となる文言に対する議論が始まりました。しかし議論のなかで問題となった文言は自分達の文言ではなかったこともあり、次々と議論が進み、勝手に解決して行くという光景をただ見ているような状況になりました。その後双方が妥協できない文言が生じ交渉になりました。頑張って参加しながら発言しましたが、英語では伝えきれない点や上手く表現出来ない点が多く、結局解決していく他の大使を傍から見ていただけになりました。そのまま会議は進み、成果文書案説明時にペアの渡邊がしっかりスピーチをしたことで一矢報いただけとなって終わりました。

この国際大会で感じたのはやはり言語の壁でした。特に自分の会議スキルを損なわないレベルの言語能力がないとやりたいことが出来ず、「日本語であればやり合えるのに」という後悔で終わることになります。今ではレベルの高かったと思うこの会議に、英語でかつ他の国の高校生と共に参加できたことが何よりの経験になったと思っていますが、今の自分ではあの会議にあと何回入っていても賞を受賞できるとは思えません。これからはこの経験を糧に他言語でもしっかりと議論できる人間になりたいと思います。



渡邊 玲央

桐蔭学園中等教育学校 3年

中学3年生の頃に“モギコクレン”と出会った私は、紆余曲折を経て昨年11月の全日本大会で最優秀賞を獲得するに至りましたが、それはひとえにクラブ活動や練習会議で多くの人に支えられてきたお陰です。当所感文を執筆するに先立ち、今までの模擬国連活動で私の価値観・人生観を変革させてくださったすべての方々——とりわけ先生方、先輩方、クラブの仲間、今回の国際大会派遣を企画してくださったみなさま——に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

今般の国際大会では、「選挙監視（Election Monitoring）」という議題の下、ウルグアイ大使として安保理（Security Council）を模した議場で論戦を交わしました。詳細は後述しますが、私が今まで参加した会議の中でも一、二を争う難しい会議でした。それも相まってか、今回の国際大会を振り返った時に真っ先に感じるのは「言葉にし尽くせない後悔」です。決して戻ることのない時間の流れを生まれて初めて実感し、模擬国連において久しくぶつかることのなかった（あるいは単にないものと見なして素通りし続けてきた）「壁」に正面衝突しました。

日本の模擬国連会議にのぞむ際、私は元より「議論レベルの抽象化・相対化」を行うことに主眼をおいてきました。複数の具体案が提示された時、それらを内包する「大理念」を設定し、大枠での合意形成を達成してから個別案件の話し合いを行うスタイルの会議行動をしてきたのだと自認しています。しかし、国際大会でそのスタイルは通用しませんでした。ひたすら具体的事象をつぶしていく議論が進展する中で作業文書の作成が始まり、「理想状態」の明記などといった議論は完全に蚊帳の外でした。議

場が日本の模擬国連会議と異なる流れになったことは瞬時に察知しましたが、いかんせん言語の「壁」もあり、即座に議論レベルの変更をするに至らず、周りの大使と比べて数歩遅れたポジションにつくこととなってしまいました。モデヤスピーチなど、公式な発言の機会がある際には可能な限り発言をしてウルグアイとしての政策・理念を発信し続けましたが、「それは議論の本質ではない」と一蹴された場面もあり（私たちが立てた政策は多くの前提の上に成り立っており、その前提が共有されていなかったのです）、会議1日目の午前中に数ヶ国とともに

に掴んでいたファシリテータとしての立場を保持し続けるのは、いよいよ不可能となりました。ウルグアイとしての「理想状態」を説明するために事前に用意していた『3ステップ』を一部の大使にしか理解してもらえなかったことがその一因であると同時に、それが議場の全大使にとって普遍妥当なものとなり得なかったことは大変に悔やまれます。

これらを踏まえた時、私たちのペアに足りなかった要素のひとつが「柔軟性」だったという考えに至りました。約2年半の模擬国連活動の中で私なりの「戦い方」を構築できたところまでは良かったのですが、それがあまりにも固定化してしまっていたことが、国際大会という高校模擬国連の集大成の場で裏目に出てしまいました。ルーティーンとして確立していた会議行動や戦略を、その場の直感だけを頼りに変更するという決定は、甚だ労力を要する不確実なものとなりました。そして当然の如く、経験論的に直感を基に起こしたアクションの多くは、眼前の議場の流れを変えるに程遠い弱い次元のもの、端的に述べれば「失敗したもの」となりました。いつの日か“Expect the unexpected（予想外を予想せよ）”という言葉聞いたことがありますが、会議の流れや詳細な論点は会議が始まるまで予測することは不可能ですので、

“Enjoy the unexpected（予想外を楽しめ）”ということの方が大切なのではないかと感じました。かねてから会議を「楽しむ」ことを目標に据えてきた私ですが、ゆとりのない中で早急な決定を求められる場面に陥ると、最善手が何かを冷静に捉えることができなくなるが故に、次第に焦りや不安に駆られ、「楽しみ」の要素が低減していったのだと思います。「柔軟性」が「会議を楽しむこと」から得られるとは夢にも思わなかっただけに、またひとつ大きな学びを模擬国連から習得することができました。

さらに、会議全体の流れを振り返ると、大局を変えられる場面が多くあったにも関わらず、思考を躊躇してしまったようにも思います。それはアメリカの模擬国連と日本のそれとの差

（アンモデがほとんどない、議長の議論に対する介入が多い、議長の意図に沿った動議以外は棄却されるなど…）によることかも知れませんが、ここであまり見苦しい言い訳はしたくありません。例えば会議2日目の午前中、双方の決議案に対して質問が行われている場面で、私に発言の機会はありませんでした。それはもっぱら、私が文言のみにこだわる大使で、議場の

「生の議論」を好んでいないとの認識が浸透してしまっていたからでしょう。他方、会議2日目の終盤、私はスピーチで「安保理としての結束」を訴えかけましたが、それは「時すでに遅し」でした。発言の機会が至極限られる場面において機会を活かした形ですが、議場の流れを変えるには残り時間が少なすぎました——「万策尽きる」の意味を体感しました。

ここまで、ネガティブな側面を中心に述べてきてしまいました。「悔しさ」が国際大会に関する記憶の中の最大のウェイトを占めている私にとっては無理のないことのような気もしますが、決して次のステップを見失った訳ではありません。「壁」の存在を前に個としての知性を無効化されてしまったこと、自分が強みにしていたことが実はそうではなかったこと、認識の齟齬が生み出す議論レベルの差によって大きな痛手を被ったこと、世界に出ていくために乗り越えなければならない物事がたくさんあること…。議場という「鏡」に自らの内面を投射することで、自分が目指す像と現状とのギャップを認識できたように思います。将来国際的なフィールドで働くことを欲している私にとって、今回の派遣の中でダイレクトに味わった忸怩たる思いは、「目標を見失わないこと」や「日々研鑽を積むこと」の大切さを再認識させてくれました。私が高校模擬国連の会議に参加する機会はありませんが、これらは必ずや模擬国連以外の分野にも適用できると確信しています。自身の理想を高く掲げ、その達成のために精進していくことは、これからの人生の中で訪れる難局を切り抜ける際に不可欠なことだと感じました。

最後になりますが、私はこの国際大会派遣を通して文字通り「人生を変える」ことができました。今まで支えてくださったクラブの顧問の先生方・先輩方・同期と後輩のみんな、引率の石本さん・鴛海さん・鈴木さんをはじめGCのみなさん、河口様をはじめ ACCU のみなさま、一緒に派遣事業に参加した同年代の6校の仲間たち、そして1年余りにわたって困難な時とともに「壁」を乗り越え続けてきたペアの永見大智君に対して最大限の感謝の言葉を述べるとともに、稚拙な文章ではありますが、これをもって私の国際大会派遣の所感とさせていただきます。



青木 優奈

鳥取県立鳥取西高等学校 3 年

私にとってこの派遣事業は、特に 4 月にあった Information Session から刺激の連続でした。ニューヨークでは様々なところへの表敬訪問を通し多くの刺激を受け、それは次第に自分自身のモチベーションとパワーになっていきました。表敬訪問先でのお話からは新しい視点を得ることができたのと同時に、派遣団メンバーの質問の数々とその姿勢に日本の高校生を代表しているのだと、改めて気付かされました。特に中満泉国連軍縮担当事務次長への表敬訪問は一生忘れられない経験として心に刻まれています。女性の活躍についての質問にお答えいただき、女性がイニシアティブをとって行動を起こしていかなければならないとおっしゃったのは、ご自身が実際に現場で体感された経験に裏付けされているのを感じました。このような様々なことを吸収した三日間を終え、いよいよ模擬国連大会を迎えることになりました。

模擬国連大会を終えて、自分の行動と会議を振り返るとまず後悔が頭に浮かびます。一番大きな原因は私の信念である、正しいと思ったこと信じてやり抜くということができなかったからです。Session I、II は会議全体においていい先駆けにすることができたと思います。そこで提出された WP でそれぞれのグループ間でそれほど大きな相違はなくコンバインを行うべき状況にありました。二日目に一度はそれを提案したものの、他(多)の大使のコンバインに対する消極的な姿勢を感じ、働きかけることを諦めてしまいました。私自身、その時点でスポンサーだったので譲りたくない気持ちもありましたが、そこで自分の利益を優先させることよりも、議場としていい DR が制作できるように自分がスポンサーを降りることを含め、交渉を積み重ねていくべきでした。それをできる立場にもあったし、そのチャンスもあったのに掴めなかったのは自分の甘さだとも思います。他にも、議題に対する論点やフォーカルポイントについて言及し、会議があるべき方向性を維持するためにできたことは多くあったのではないかと思います。しかし、できなかったことへの後悔はありますが、自分がした行動、それ自体に悔いはありません。それは、会議への準備段階から議題にとことん向き合い、考え抜いた政策を伝えること、賛成してくれる国がいたこと。That's a so great idea! と言って政策を共有し、会議でチームとしてどう動くか考えていた

ときにはグループのみんなで That's so awesome! と言って笑顔になったこと。グループの人と役を分担しつつ他国へ説得に向かい、また merge はできなくても投票ではお互いをサポートしようと約束したグループの大使にも頻繁に話しかけ、賛成してくれる国集めに成功、high five を交わしたこと。これは目指していた、いいチームワークのグループを作る、ということ達成できたのではないかと思います。

最後に、何よりこの派遣団の一員として大会に出られたことが一番の誇りです。また会議の夜、明日に向けて準備するルームメイトに真摯さと静かに燃える闘志を見てとてもはげまされました。ホテルの 2108 号室という小さなところも含めニューヨークでのすべての経験はまさに Life changing なものになりました。多くの面でサポートしていただいたすべての人にこれ以上の感謝はありません。ありがとうございました！



鎌田 康生

鳥取県立鳥取西高等学校 3 年

『鳥取西高校』という名前を模擬国連に関わる何人の人が知っているのでしょうか。模擬国連部もなく近くに練習会もない。そもそも全日本大会に応募したことすらない。私たちの活動はここから始まりました。模擬国連がどのような活動なのか誰にも聞くことができなかったため見学に行かれたことのあった先生方に携帯の動画を見せてもらい、かろうじてどのようなものか想像しながら、全日本大会まで準備を行いました。一度だけ、他校の練習会に参加させていただいてやっとプロシージャを理解し、全日本大会へ飛び込みました。そこで小規模な先進国グループを率いる 1 か国となり、優秀賞を受賞しました。何年も模擬国連を体験してきた他の受賞者と並び、「本当に自分たちが？」と半信半疑でいたことを覚えています。そして国際大会。事前にすべて英語で行われる会議に一度参加させていただいたのち、渡米しました。しかし、そこで会議での自分の英語力の不甲斐なさを痛感し、また議題概説書が圧倒的に薄く、論点が絞れなかったり、事前に配布された参加国が信用ならないとの話があったりと、不確定な要素が多く、大きな不安が残ったままの参加でした。

私たちの議場は UNESCO、議題は Finding the Right Balance Between Tourism and Conservation でした。会議初日、まず、私たちはウルグアイのある南アメリカ地域や、同じ政策を推している南アフリカでブロックを形成しようと考えていました。事前の情報では参加国数が 190 以上あり、そこそこの大きさにはなるはずでした。しかし、蓋を開けてみると参加国は 50 ほど、そして最大の協力国となりえるブラジルがいらない、などと想像以上の状態で、first session の最初のアンモデで集まってくれた国はアルゼンチンだけでした。その後、ペアが話をしていたメキシコ、カナダの率いていた小ブロックに入ることとなりました。それからは私がそこに残り、政策の交渉や WP 制作、ペアは外交して協力できそうなブロックを探す、という方針をとりました。しかし、その二か国の大使の英語が非常に早く、ついていくのに精いっぱい、私は first session でブロック内での発言権をほとんど得られませんでした。このままでは主導権を取れないため昼休みに研究主任の大学生からアドバイスをいただき、その後の second session では、自分がまとめるから、とノートとペンを

もって強引に自分に話させるようにし、まとめ役を買って出てブロック内での立場を作りました。その間にペアが他ブロックとの交渉で私たちの政策を含む形でのマージする話をつけてくれたので、次に私はそこの WP 制作交渉に移りました。ただ、そのブロックのリーダー国に WP を書く権利をとられてしまったため、自分たちの用意してきたものをベースにすることはできず、夜の間に自分たちの手で DR の形にする、というプランも実行できませんでした。しかし、その大使の英文を書く力は明らかに高かったため、これは仕方のなかった面もあったと思います。二日目、third session で前日の議長のアドバイスの中に、どのブロックも政策が Tourism の要素が弱く、Conservation のみに偏りすぎている、との指摘がありました。このため、自分たちの政策がいかに balance に寄与するかを説明する条項を DR へ追加することを自ブロック内で主張して、付け加えたのち、ブロックのスポンサー国として他二か国とともに WP の説明を行ってシグナトリー集めを開始しました。この時点で WP は 5 つ提出されており、マージを強いられる可能性も高かったため、同時にマージをするとしたら、という話もペアが行っていました。結局、マージの勧告は無く、session の最後にはシグナトリー 24 か国、スポンサー 3 か国で確実に DR は通るだろう、というところまでたどり着きました。実際、fourth session の投票では、最も多くの賛成票をとりつけて、私たちのブロックの DR は採択されました。

今回の会議では、私の場合 first session 後からは自分の政策の説明や交渉など、アウトプットや 1 対 1 の会話はなんとか英語でこなせましたが、他のグループの文書の説明を聞いたうえで質問する、などの行動をとるには至れず、ブラカードを上げられませんでした。自分の力不足であったし、できないなりに何かしらの発言はできたはずであり、反省したポイントです。逆に、うれしかったこともありました。ブロック内での活動を行っていった結果、あなたの名前は何か、と二組の大使が聞いてくれたことです。また、二日目の朝早くに議場に入ったとき、チェアにウルグアイの席はここだよ、とこの大使が確認することなく示されたこともありました。自分たちがキーロールを何とか担えていたのではないか、と思えた瞬間でした。手探りの状態からニューヨーク派遣までたどりついた模擬国連を通して、多くのことを学ぶことができました。

一つは、「ペアの重要さ」です。私は、ペアが青木さんでなかったらここまで来られなかったと思っています。全日の時から私が内政、青木さんが外交、と分担し、この役割をニューヨークでも今まで以上に担ってくれました。また、私が **first session** でうまく立ち回れていなかったときに初めにサジェスションをくれたのも青木さんでした。本当にありがとうございます。もう一つは、「自分のできることは必ずある」、ということです。英語の会話に割り込めなくても、人に自分の話を聞いてもらう方法はあるし、さらに工夫すればもっと多くのことができていたと思います。このことは将来、自分が逆境に立たされた時でも道を切り開いていく手助けになるし、心を折らずに頑張る支えになるものだと確信しています。模擬国連活動では、社会的な話題だけでなく、ペアや、他国大使とのコミュニケーション、交渉を通じて知識よりも重要な対人関係の重要性を学ぶことができます。全日本大会、ニューヨークの国際会議で出会った大使、また一緒に渡米した派遣生と関係が持てて、非常に嬉しかった。すべての人にありがとう、と言いたいです。

最後になりましたが、グローバル・クラスルームの皆さん、ACCUの皆さん、そして先生方、本当にありがとうございました。特に大学生の皆さんは夜遅くまで私たちに合わせてサポートをしてくださり、大きな力となってくださいました。本当にありがとうございました。



UNICEF 訪問



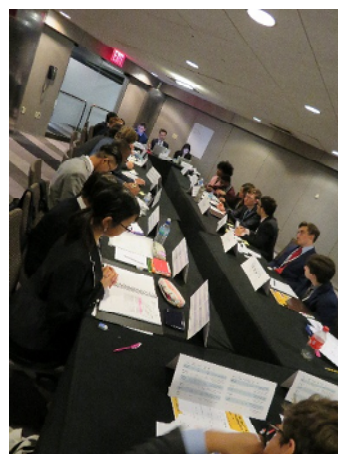
タイムズスクエア
にて



UNWOMEN 訪問



ECLAC 会議の様子



GA3 会議の様子

支援者・支援団体一覧

本大会の実施にあたり、多くの方々から温かいご支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます（敬称略）。

【後援】

外務省 文部科学省 国際連合広報センター

【協賛】

株式会社 iBECK
株式会社エヌエフ回路設計ブロック
キッコーマン株式会社
TOEFL Junior® (GC&T)
株式会社 JTB
SMPO ジャパンちきゅう倶楽部
（SMPO ホールディングスグループ）
一般財団法人凸版印刷三幸会
株式会社ナガセ
株式会社ニチレイ
海外トップ大進学塾 Route H
（ベネッセコーポレーション）
株式会社みずほ銀行

株式会社内田洋行
学校法人河合塾
株式会社公文教育研究会
株式会社講談社
学校法人駿河台学園
学校法人高宮学園 代々木ゼミナール

トヨタ自動車株式会社
株式会社日能研
株式会社日能研関東
Global Learning Center
（ベネッセコーポレーション）
三菱商事株式会社

【協力】

日本航空株式会社株式会社
理想科学工業株式会社

【助成】

公益財団法人渋沢栄一記念財団
公益財団法人公文国際奨学財団

【表敬訪問機関】

国連事務次長軍縮担当上級代表 中満泉氏
国連日本政府代表部
日本貿易振興機構（JETRO）
UN WOMEN
UNICEF

（五十音順）



本事業は、留学促進キャンペーン
「トビタテ！留学JAPAN」の趣旨に賛同します

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）からのメッセージ

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、「グローバル社会を担う未来のリーダーを育成する」という趣旨にご賛同いただいた、企業様、団体様よりご協力いただき、2012年度よりグローバル・クラスルーム日本委員会と共催で、全日本高校模擬国連大会の実施や、高校模擬国連国際大会への日本代表団派遣支援事業を実施しております。次世代を担う高校生たちに世界と向き合える機会を提供し、グローバルリーダーとして世界を変革していく大人へと成長してほしいと想いを込め、毎年事業の充実に努めております。

第12回を迎えた、本年度の派遣支援事業は、昨年の全日本高校模擬国連大会に応募した233チームからの書類選考を通過した高校生（86チーム172名）から選ばれた高校生が日本代表として高校模擬国連国際大会へ出場しました。派遣生たちは、国際大会への出場が叶わなかった高校生の想いや夢を背負って、国際大会までの約5ヶ月間、一生懸命準備をしてきたことと思います。なかには、高校3年生になる派遣生も多く、受験勉強との両立は容易いことではなかったことが想像できます。

国際大会出場に向けて旅立った5月8日は、緊張した様子もなく、学校の垣根を越えて派遣生同士和気あいあいとした雰囲気のなかニューヨークに到着しました。国際機関への訪問の際も、質疑応答では誰もが積極的に質問をしている姿が見られ、頼もしい日々でした。しかし、国際大会前夜になると、みな表情が変わり緊張感が漂いました。会議を重ねるごとに、各々自分と向き合い、試行錯誤していた様子が伺えました。結果は様々だったと思います。異なる価値観に戸惑い、時には言語の壁を感じ、悔しい思いもたくさんしたことは、派遣生から流れた涙や表情でみてとることができました。日本にはないフィールドで、文化も言葉も価値観も違うなかで味わった悔しさや自分なりに成し遂げたことへの達成感を大切に、将来成長してほしいと思います。そして、ぜひその異なるものや多様性を楽しみながら世界へと羽ばたいてほしいと願っています。

最後になりますが、全日本大会の開催にあたり、ご協賛、ご協力いただきました企業様、団体様およびご尽力いただきました関係者各位、派遣生の引率を担って下さいました教員の皆さま、本事業の運営を担うグローバル・クラスルーム日本委員会の皆さまには心よりお礼申し上げます。引

き続きご支援を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

国際教育交流部
河口 枝里子

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターについて（ACCU: Asia-Pacific Cultural Center for UNESCO）

ACCUは、ユネスコの基本理念に基づき、相互理解の促進と持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において、先駆的な視野に立った地域協力・交流活動を推進しております。その活動の一貫として2012年より、日本の若い世代のグローバルな視点育てようという目的で高校模擬国連推進事業が始まり、グローバル・クラスルーム日本委員会や全国中高教育高校模擬国連研究会と協力しています。

その他には、教職員の国際教育交流事業を実施し、タイ・インド・中国・韓国の教職員と日本教職員の相互交流を図ったり、カンボジアでの識字推進事業、ESD（持続可能な開発のための教育）やSDGs（持続可能な開発目標）活動の教育関係者への推進事業を行ったり、ユネスコスクールの事務局などを担っています。

*ユネスコスクール…ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を实践する学校のことを指します。

ACCU ホームページ
<http://www.accu.or.jp>



グローバル・クラスルーム日本委員会（2018 年 6 月現在）

（敬称略、順不同）

【アドバイザー】

特別顧問 明石 康

（元国連事務次長 / 公益財団法人国際文化会館理事長）

【評議員】

星野 俊也（議長）

（日本模擬国連 OB/ 国連合日本政府代表部大使
次席常駐代表）

紀谷 昌彦

（日本模擬国連 OB/外務省 中東アフリカ局アフリカ部参事官 国際協力局アフリカ開発会議担当大使）

中満 泉

（日本模擬国連 OG/ 国連事務次長・軍縮上級代表）

柿岡 俊一

（埼玉県立浦和西高等学校教諭）

竹林 和彦

（早稲田実業学校教諭）

米山 宏

（公文国際学園中等部・高等部教諭）

【理事会】

岡野 源（理事長）

（東京大学法学部第 1 類 3 年）

石本 達也（研究主任）

（東京大学工学部化学システム工学科 3 年）

明石 美優（広報局長）

（聖心女子大学文学部心理学科 3 年）

鴛海 晶（研究）

（東京大学前期教養学部文科 I 類 2 年）

鈴木 雅子（広報局）

（日本大学生物資源科学部獣医学科 2 年）

田邊 雄斗（広報局）

（東京大学前期教養学部文科 I 類 2 年生）

児玉 大河（理事）

（慶應義塾大学法学部 2 年）

二木 恵（広報局）

（早稲田大学創造理工学部経営システム工学科 2 年）

二木 浩司（理事）

（東京大学前期教養学部理科 I 類 2 年）

小塚 慶太郎（広報局）

（立教大学経営学部経営学科 1 年）

小寺 圭吾（理事）

（早稲田大学政治経済学部国際政治経済学科 2 年）

高橋 佑太

（東京大学経済学部経営学科 4 年）

中村詩音

（国際基督教大学教養学部 4 年）

南 篤

（東京大学農学部応用生命科学課程生命化学・工学専修 4 年）

安田 侑加

（聖心女子大学文学部英語英文学科 4 年）

関連リンク

グローバル・クラスルーム日本委員会 / <http://www.jcgc.accu.or.jp>
Japan Committee for Global Classrooms

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/ <http://www.accu.or.jp>

米国国連協会 / <http://www.unausa.org/>
United Nations Association of the United States of
America

グローバル・クラスルーム模擬国連大会事務局 <http://gci.gclaumun.org/>
(Lebanese American University)

【お問い合わせ】 グローバル・クラスルーム日本委員会
Email gc@jmun.org



編集・発行

グローバル・クラスルーム日本委員会
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター